

《二〇一五年五月二十二日開催 講演会「世界の中の日本 第三回」要旨》

『アイヌ民族否定論に抗する』を通してアイヌについて学ぼう！

マーク・ウインチェスター、岡和田晃

はじめに

二〇一五年一月、私たちは共同編集という形で、総勢二十四名の執筆者からなる『アイヌ民族否定論に抗する』（河出書房新社）という本を出版した。この本の出版に至る直接の

きっかけは、二〇一四年の八月十一日に、自民党所属の札幌市議会議員（当時）だった金子快之（かねこ やすちか）がインターネット上の短文投稿SNSであるツイッターに、「アイヌ民族なんて、いまはもういないですよ。せいぜいアイヌ系日本人が良いところですが、利権を行使しまくっている。この不合理。納税者に説明できません。」と書き込み、社会問題になったためだ。かつて小規模に存在していた「アイヌ民族否定論」なる言説が、金子発言をきっかけに、大々的にネット上であふれるようになったのである。同年十一月十一日には自民党所属

の北海道議会議員（当時）であった小野寺秀（おのの てるひら）が「アイヌ民族が先住民族かどうかには疑念がある」と道議会で発言した。その三日前、いわゆる「行動する保守」と呼ばれる人たちがアイヌの排斥を叫ぶデモ行進を行い、アイヌへのヘイトスピーチが街頭にも飛び出していた。

『アイヌ民族否定論に抗する』という本の大きな特徴は、作家、評論家、研究者、活動家、映像作家、アイヌ文化学習者などといった様々な観点から、それぞれの執筆者が、アイヌ民族否定論への対抗言説を組み立てていることだ。

同書の刊行後、私たちは、神田外語大学日本研究所主催講演会「世界の中の日本」シリーズの第三回として——執筆者のうちから五名がパネリストとして参加する——「アイヌ民族否定論」やアイヌに対するヘイトスピーチの問題とその背景を解説する企画を提案し、二〇一五年五月二十二日に、「世界の中の日本 第三回『アイヌ民族否定論に抗する』を

通してアイヌについて学ぼう！」が開催された。以下が、同日の議論のエッセンスを抽出・整理したレポートである。マーク・ウインチェスターが構成と下書きを、岡和田晃（おかわだあきら）が推敲を担当した。

【講演会の構成】

講演会は、第一部の映像紹介（17:00-17:45）と、第二部のトークセッション（18:00-20:00、登壇者の基調報告を含む）とで構成された。

【解説と問題提起】

第一部の開始前にウインチェスターは講演会の大前提を共有しようとした。『アイヌ民族否定論に抗する』の出版にあたって執筆者が取り掛からなければならなかった複雑な作業を解説したのである。『アイヌ民族否定論に抗する』では、人口の〇・〇三%にも及ばないアイヌ民族とはまず誰かを紹介し、昨年の札幌市議会議員の発言を起爆剤としてネット上にあふれ容易にアクセス可能となったアイヌ民族を否定する言説の何が間違っているのかということ指摘し、対抗する意義を訴えなければならなかった。

そもそもアイヌ民族についての基礎知識が全国的にまだまだに充分とはいえない状況で、「社会的弱者が税金や福祉に群

がっている」という新自由主義をとまなうマジヨリテイの転覆した被害者意識という文脈が存在する。そこからアイヌ民族を否定する言説が現れてきたことを指摘しつつ、アイヌ民族否定論に反対する対抗言説を提示しなければならない、という問題提起を行った。

【「アイヌモシリ・アイヌ民族の誇り」上映】

第一部の映像紹介では、北海道庁が制作した『アイヌモシリ・アイヌ民族の誇り』（二〇一二年）の上映を行った。この映像は北海道庁インターネット放送局のホームページで視聴できるが、アイヌの歴史と文化、政治と現状、または他国の先住民族との国際交流などを含めて、アイヌ民族を幅広く紹介しており、「アイヌ民族とは誰かを紹介する」にふさわしい映像だと判断した。

なお、否定論の常套句に、「アイヌ民族でありながら日本国民でもある」ということは、両立しえない」というものがある。この映像で北原次郎太氏（現・北海道大学アイヌ・先住民族センター准教授）が、アイヌ語による自己紹介の直後に、「今話したのはアイヌ語です。私は普段は日本語で会話をし、暮らし方は日本の他の皆様と変わりはありません。日本国籍を持つ日本国民であり、そしてアイヌ民族なのです。」（018-1:18）と明確に述べていることは、それ自体が否定論

への対抗言説になっている。

【土田宏成先生の挨拶】

第二部のトークセッションの冒頭で、日本研究所所長である土田宏成先生が、講演会の意義をうったえる挨拶を行った。民族否定やヘイトスピーチの問題が「円滑な異文化コミュニケーションによってそれぞれの地域や国の文化と伝統を理解・尊重し、相互理解を深めることにより世界の平和の礎を築く」という神田外語大学の建学理念から真つ向から逸脱しているものだというのである。その後、パネリストの紹介が行われ、トークセッションが始まった。以下は、それぞれのパネリストの報告の要約である。報告者の多くが、パワーポイントを併用し視覚的な説明を加えていたことを付記しておきたい。

1 「アイヌの人たちに対する差別は、新しいステージに達した」 香山リカ

香山^{かやま}リカ氏は精神科医・立教大学教授。近著に、ウインチェスターとの対談を含む『ビューマンライツ 人権をめぐる旅へ』（ころから、二〇一六年）。「アイヌ民族否定論に抗する」には「アイヌ差別に抗して 北海道人として精神科医



香山リカ

として」を寄稿している。

香山・私は一九六〇年、札幌市生まれ。小学・中学時代は小樽の学校に通っていた。大学卒業後、三〇代中盤までは、北海道の病院に勤務していた。だから北海道民としてのアイデンティティがある。アイヌに対して否定的な感情はなく、素朴に敬意をもっていた。ただ、差別はよくないと思って、自分がそのことに対して発言したり、何か運動を起こしたりすることは、まったく考えていなかった。ところが、認識を改めざるをえなくなる衝撃的な事件が起こった。二〇一四年八月の金子市議によるツイッター上の発言だ。

もともとアイヌの人たちが民族として存在し、そのために差別を受けてきたと思っていた。しかし、その民族が「いい」と言われた。そのうえで「利権」を行使しまくっていると、非難されている。しかもツイッターでは、金子発言に対して「その通りだ」と賛同の声が集まり、中傷が拡散されていった。これを見て「アイヌの人たちに対する差別は、新しいステージに達した」と感じ、だからこそ『アイヌ民族否定論に抗する』に参加した。

差別されて低い生活水準を余儀なくされている人たちが「利権」を行使している」と非難される。ひいては、不当な「利権」を得るためにアイヌだと「なりすましている」とまで難癖をつけられる。これは、ここ数年日本でも大きな問題になっている、在日朝鮮人・韓国人へのヘイトスピーチと同じ構図だ。しかも、アイヌに関しては「利権」だけじゃなくて、民族そのものが本当はいないんだと、存在そのものが否定されている。

問題を解決するため、オピニオン漫画『ゴーマニズム宣言』シリーズで著名な漫画家・小林よしのりの与えた影響に着目した。小林は二〇〇八年から一〇年頃まで、アイヌや沖縄について盛んに発言していた。金子発言やネット上での「新しい」アイヌ差別は、小林のアイヌ観がベースになっている。最近の小林は安倍政権に疑問を投げかけるなど、一時

では考えられない姿勢を見せるようになった。そんな小林がアイヌについて「この問いに答えなさい」と、ブログで私（香山）を指名してきたので、今だったらかつての持論を撤回して、ヘイトを拡散する人たちを叱ってくれるんじゃないかと期待し、今年一月に『創』という雑誌で対談を行った（二〇一五年三月号、創出版）。掲載号は売り切れ、その後『対決対談！「アイヌ論争」とヘイトスピーチ』（創出版、二〇一五年五月）というブックレットにもまとめられた。読者からの反響は大きかったが、結果的には、小林の考えを変えることはできなかった。自分の非力を痛感している。

2 「先住民族」というのは民族概念ではなく、政治概念

上村英明

うえむらひでき
上村英明氏は恵泉女学園大学教授、市民外交センター代表。近著に『新・先住民族の「近代史」——植民地主義と新自由主義の起源を問う』（法律文化社、二〇一五年）。『アイヌ民族否定論に抗する』には「アイヌ民族に対するヘイトスピーチを許すな」を寄稿。

上村…NGOを運営しながら国際法を研究してきた。金子市議のような人たちとは戦っても仕方がないと思っていた



上村英明

が、『アイヌ民族否定論に抗する』への参加で、危機感を共有するようになった。近代以降の差別的イデオロギーのポインントは、ある部分が真実だということ。その真実に嘘八百をコテコテに装飾して拡散させる。代表的なのはナチスの社会進化論。進化論は、生物学上一定の正当性がある。これを使って、人間にも進んだ人々と遅れた野蛮な人たちがいるという怪しげな言説を展開してきた。金子発言も構造は同じだ。私の問題意識は、このようなイデオロギーによる特定の集団に権利の主体性がないという差別的解消で、特に先住民族の権利を扱ってきた。

「先住民とは誰か」という問いに、一般に明確な答はない。先住民の権利を否定したい人たちが定義論を持ち出す懸念が国際的に了解されているためだ。ただ、権利を保障するには一定の規程が必要なことも事実。どうにか納得のいく

規程を設けたのは国際労働機関（ILO）だった。ILOが一九八九年に制定した第169号「原住民および種族民条約」第一条では、その規程が明記されている。ここでの先住民族は、実は民族概念ではない。言語や神話、儀式の保持などの民族概念はどこにも書かれておらず、あくまでも統合に伴う不当性、集団としての自己認識など政治概念が中心だ。

そもそも、現在の国境確定などその国に不当に編入されることで、先住民族は「生まれ」る。「北海道」も典型だ。一八五〇年代、近代国家の形成過程で、日本はロシアとの国境画定の必要にかられ、アイヌ民族の領域を全部日本と言いくるめた。それによって、アイヌ民族は国民という名目で一方的に統合され先住民族となった。一九八七年以来、国連での先住民族の権利の専門的な話し合いにアイヌ民族は参加してきたが、日本政府はこれを否定したことは一度もない。つまり実質的に、日本政府はアイヌを先住民族だと長らく認めてきた。しかし、いまだアイヌ民族には「権利」が保障されていない。その背景には政府が「北海道」の歴史を責任ある形で見直し、アイヌ民族の剥奪された権利をきちんと確認して来なかつたことがある。ヘイトスピーチはこの背景から生まれているともいえる。

3 「攻撃を受けていることそれ自身が、アイヌというものが否定しきれない存在という証拠」

新井かおり

新井かおり氏は、立教大学大学院博士後期課程で社会学を研究している。論文に「戦後のナラティブ・ターンから眺めるアイヌの諸運動と和人によるアイヌ研究の相克」（『応用社会学研究』56号、立教大学社会学部、二〇一四年）など。『アイヌ民族否定論に抗する』には「北海道アイヌ協会小史」とアイヌのはざま」を寄稿している。

新井：私はアイヌ民族の一員だ。最初に断っておくが、アイヌになりすますのは、まず不可能。認められるには、厳しい規準があるからだ。例えば、アイヌ協会に加入するには先祖の戸籍を提出しなければならない。

今までのアイヌによる社会運動と、そこにある問題について考察したい。アイヌによる運動には前提として、和人に自らの尊厳が剥奪されてきたという歴史的な認識がある。これ以上剥奪されたくない、尊厳を取り戻したいというのが根本的な動機だ。

アイヌによる社会運動には二つの動きがある。一つは、戦前から続く「同化思想」に基づくもの。アイヌとしてのアイ

デンティティを問うのではなく、自分は日本国民になるから今さらアイヌとして差別するな、と主張するものだ。注意すべきは、和人になるのではなくて、近代化された「日本国民」の一員になるということ。日本国に属するのだから同等に扱ってほしいという平等への希求がある。

もう一つ、「差異化」というアイデンティティの働きもある。日本が高度経済成長を経て、アイヌが貧しくて、差別されているという状態は変わらなかった。そこでむしろ自分はアイヌだという差異が打ち出されるようになった。とりわけ戦後、一九六〇年代終わりからの、政治の季節には、差異化の言説が盛んになった。ただ、新左翼による爆弾闘争などが起きた際、犯人がアイヌではないにもかかわらずアイヌのせいとされ、偏見が悪化するという被害が生じた。同化思想の例でもわかるように、そもそも「アイヌ＝左翼」という認識は間違っている。

こうした経緯から、政治的な主張ではなく文化でアイヌという差異を打ち出そうという方針転換が起きた。一九八〇年代初頭まで、アイヌというのはいずれ減じてしまうという、和人側の物語があったが、アイヌ文化が盛り上がることは、その種の衰亡論に対抗するための大きな力となった。ただし、九七年にアイヌ文化振興法が制定されてからは、政府や自治体などが関係することでアイヌ文化が公共事業化し、ア



新井かおり

アイヌが自己主張することの重みが薄れてきたと危惧している。

政治運動にしろ、文化運動にせよ、活動家はアイヌらしさを求めるように先鋭化しがち。だが、現在の日本では、アイヌに生まれたとしても日本文化に囲まれて生きていくわけだから、アイヌは血筋や文化ともに複合化していかざるをえない。運動が先鋭化すると、そういう現実が無視され、とりわけ若いアイヌが置き去りにされることがある。非アイヌである支援者の問題もある。当事者に過剰に期待することで、支援者自身の意見をスポイルしてしまう支援者がいるのだ。ウマの合うアイヌを選んで、アイヌの代表のように仕立てあげよう。こういふことをされると、アイヌ間の人間関係にひびが入りかねないし、和人への信頼を損ねがちになる。

ここで見てきたさまざまな問題を、全部拾って成り立っているのが現在のアイヌ民族否定論。つまり否定論とは、今までの運動にある問題を裏返しにしたものであるともいえる。私はアイヌであることをカムアウトするがゆえに、ツイッターで毎日のように否定論者から攻撃を受けている。そのところそが、アイヌというものが否定しきれないことの、確かな証拠だと感じている。

4 「文学を通して歴史と向き合おうとするならば、無縁でいられない問題」

岡和田晃、山科清春、長岡伸一

岡和田晃は文芸評論家、共愛学園前橋国際大学非常勤講師（現在）。近著に『向井豊昭の闘争 異種混交性の世界文学』（未來社、二〇一四年）。今回の発表は同書と、『アイヌ民族否定論に抗する』に寄せた「歴史修正主義と〈マイノリティ憑依〉を、ともに打破する言葉はどこか——教育者にして作家・向井豊昭の調査と思索、その原点」に強い関係がある。

岡和田は、ウインチェスター、香山氏、上村氏、新井氏の議論を総括した後、客席に山科清春氏と長岡伸一氏が来場していたのを発見、急遽、両氏へのインタビューを試みた。山科氏はアイヌの歌人・違星北斗を研究するサイト「違星北

斗.com コタン」の運営者で、「遼星北斗の言葉の『悪用』について」を、長岡氏はアイヌをテーマに番組を制作したところのあるTVディレクターで、「宗主国の帝都を歩く」を、それぞれ『アイヌ民族否定論に抗する』に寄稿している。

山科…私が研究している遼星北斗を一言で説明すれば、かつこいい人。アイヌという人たちが「滅びゆく民族」だと言われた時に、いやアイヌは滅びない、俺は現にここにいるというふうには叫びをあげた。彼は短歌欄を使ってアイヌの叫びを発信し続けてきたが、そこならば自由な表現ができたから。現代でいえばツイッターだ。しかし、アイヌ民族否定者は、この自由を逆手に取り、遼星北斗の発言を都合のよいように曲解、悪用を繰り返している。きちんと活字で遼星北斗の発言の文脈を説明する必要性を感じた。

長岡…TVディレクターとして働くうちに、首都圏在住者にとつてアイヌは身近ではない、という問題に直面した。だから、『アイヌ民族否定論に抗する』では、東京でアクセスできる歴史的に重要な場所を三箇所、紹介してみた。新宿区霞ヶ丘、文京区本郷、港区芝公園。実用ガイドとして書いたつもりなので、ぜひ実際に足を運んでみてほしい。



岡和田 晃

岡和田…山科氏と長岡氏の指摘は重要。北海道の歴史や文化とアイヌとは、切っても切り離せない関係。にもかかわらず、マイナーだからと悪用されたり、「中央」の感覚では身近でないと思われたりする。私が論じた向井豊昭は、まさにこうした問題に、生涯を通じて向き合った先駆的な文学者。向井は一九六二年から道南の日高地方で小学校教師としてアイヌの子どもたちを教え、直面したジレンマを六六年に発表した「うた詠み」等の小説に書いてきた。同年には「北海道ウタリと教育を守る会」の設立メンバーとなっている。新井氏が述べた爆弾闘争についても、直接関与はしていないが、征服者の和人としての立場から「無縁であることはできな

い」と、痛みを背負いつつ作品に昇華させてきた。アイヌ民族否定論の背景には、「マイノリティと左翼がメディアを牛耳っている」という思想があるが、歴史の暗部を照らす向井の仕事はこうした短絡的な陰謀論へのカウンターとして機能する。今こそ、向井作品をはじめ、文学による想像力の再評価が必要だ。文学を通して歴史や現在と向き合おうとするのであれば、歴史修正主義やヘイトスピーチに対し見て見ぬふりをすることはできないからだ。

5 「先住民族否定論は、日本に限った問題ではない」

マーク・ウィンチェスター

日本研究所のマーク・ウィンチェスターは、本紀要の第7号に「人間と呼ばれるものへの抗排であるように——佐々木昌雄とアイヌ近現代思想史における贖いの政治」（山岡健次郎と共訳）を寄せている。『アイヌ民族否定論に抗する』では、テッサ・モーリス・スズキ「日本の全体的な政治の環境がヘイトスピーチを育んでいる」でのインタビュアーを担当したが、今回の発表はここで展開された話題と共通性がある。

ウィンチェスター…金子発言は、突然、真空から降って湧



マーク・ウィンチェスター

いたわけではない。上村氏の話にあったような、先住民族の政治と密接に関わっている。つまり、直接的な反動なのだ。だから、日本だけではなく世界的な先住民族否定の問題として、アイヌ民族否定論を捉えなければならない。そのルーツを探ってみた。

まず、河野本道という文化人類学者について考えたい。『アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議』が決定された二〇〇八年、小林よしのりがアイヌについて漫画を描く際、小林のブレインとなったのが河野。河野は一九七〇年代にはアイヌ解放同盟に協力し「アイヌの社会の構成員による主体的な活動」を訴えていた。ところが、九六年には『アイヌ史／概説』（北海道出版企画センター）という歴史修正主義的な解説書を刊行し、アイヌに対する姿勢を一八〇度転換させた。『アイヌ史／概説』で河野は、研究者としての科学

的客観性を自称する立場から、現代のアイヌ民族のアイデンティティを、「ニュー・アイヌ」として非難している。

それだけではない。河野は、アイヌは歴史的に一度も統一した民族になったことはない、という言い方までしている。これがなぜ問題かいうと、上村氏が述べたように、近代国民国家に編入されることで先住民族が「発生」したから。先住民族に限った問題ではない。奴隷制によってアフリカからアメリカに連れてこられた黒人たちが、「ニグロ」になる過程は、アイヌが「旧土人」として扱われるようになった過程と共通している。アイヌの近代におけるアイデンティティは、旧土人として扱われた経験から形成されてきたのだ。

河野はこのプロセスをわかっているながら、しきりにそれを否定しようとする。アイヌの先住民族性を主張するのは、エスノセントリズム 自民族中心主義的でけしからんと非難するのだ。ただ、河野のような議論はアメリカにも、オーストラリアにも存在する。テッサ・モリス＝スズキ氏が、「ファースト・コンタクト」というTVのリアリティ・ショーを教えてください。予告編はYouTubeで視聴できるので、実際に上映したい。

(上映を終えて) 番組の冒頭では、「アボリジニは、福祉を受けるためにアボリジニと名乗っている」という偏見を抱いている人たちが紹介されたが、彼らの主張はアイヌ民族否定論者と相似形をなしている。こうした世界的な否定論には、

新自由主義経済体制が密接に関わっている。サッチャー時代に作られたイギリス保守党の選挙ポスターを紹介したい。

腕組みをした黒人の写真があり、次のようなキャッチコピーが添えられている。「労働党は彼を黒人と呼びます。保守党は彼を英国人と呼びます。」こうした黒人観は、河野本道や小林よしのりのアイヌ観とびつたり重なる。彼らは、アイヌ民族が先住民族として認められると日本国民が分断される、と危惧しているのだ。恩着せがましく、新自由主義的な見方だ。社会のマジョリテイによって歴史的な不正義や不当な扱いをされてきた人々に対して「自己責任」(ヘルプユアセルフ) を声高く叫ぶことは、暴力以外のなものでもない。

【質疑応答】

登壇者の発表が終わると、無記名の回答用紙に記入する形式で、来場者からの質問が行われた。アイヌ語や歴史認識、アイヌ民族のアイデンティティの問題、アイヌ政策の是非などが問われ、それぞれについて発表者が応答を行った。

【講演会を終えて】

アイヌ民族否定論がネット上で拡散した背景には、アイヌ文化への理解がまだまだ不足している、という現状がある。差別を未然に防ぐためには、ともすれば専門家が軽視しがち

な素朴な疑問にも答えていかねばならない。『アイヌ民族否定論に抗する』の編集にあたっては、アイヌについて知ること、現代を読み解く視座が与えられる入門・啓発の書となることを重視した。そのうえで、本講演会の企画・運営にあたっては、学生にとって有用なプログラムでありながら、広く一般社会人に訴えるイベントとすることを心がけた。

アイヌをテーマとする講演会は本学において初の試みだったが、本学および執筆者のツイッターやウェブサイトで、日本

SF作家クラブ公式サイト上での告知協力が得られた甲斐もあって、本学の学生・教職員のみならず、外部からの来場者も多数見受けられ、参加者総数は一〇七名を数えた。長時間のパネルだったが、最後まで会場の熱気は維持されていた。当初の目標は達成され、本学日本研究所にとっても大成功といえるものになったと総括できる。次回以降の講演会にも、多くの参加者の来場を期すべく、微力を尽くしていきたい。